

口語法別記

名詞

【二三】「月々、拂う、時々、來る、さまざま、ある、などわ、變わつて副詞に用いられるのである。

【二六】名詞にわ、仰せ「思召」お出まし「お目見」御意「拜謁」など、もとく、敬う意味を含んで居るものがある。

代名詞

【三九】【四〇】同輩以上、以下、としたのも、唯、およその區別である。

「この」「その」「あの」「どの」の意味わ、次の指示代名詞の(四五……五〇)(五六)に云う。對稱、他稱の複數を云うに、同輩以上、同輩に、「皆さま」「皆々さま」「皆さまがた」「皆さん」「皆さんがた」「同輩、同輩以下に、「皆みんな」と云うがある。

不定稱が「も」に伴つて、「どなたも」「いらつしやいませぬ」「だれも來ない」と云えば、

【三三】

【二六】

名詞

【三九】

【四〇】

代名詞

「皆」の意となる。

他稱の「このひと」を「このひとぐ」と重ねて複数に用いることがある。「そのひと」と「あのひと」、不定稱の「どのひと」も同じように用いられる。

自稱に、尙「手前」「拙者」「自分」「わし」「おれ」「おいら」「おら」などがあり、對稱に「御前」「貴公」「貴様」「てまえ」「其方そのほう」などがあり、他稱に「こいつ」「そいつ」「あいつ」「きやつ」、不定稱に「どいつ」などもあるが採らぬ。

○口語の代名詞の、本書に採つたもの、採らぬもの、共に、古書に見當つたものを、次に擧げて置く。

○室町時代

義經記、忠信吉野山合戦の事、鎌倉殿の弟判官殿のわたらせ給候よし承て、よしのゝ、玄ゆぎやうこそ、まかりむかひ候へ、わたくしらは、何のゐる候はねば、一まづ、をちさせ給ふべく候。

狂言記、二人袴、私わがが呼ふで参りませう。同、宗論、私わがは、あの者の連でござる、私わがにも、何卒、宿をかして下されい。

江戸時代

醒睡笑、七、わたくしは、高野ひじりに、あらねども、おいにおいたる、ゆるぎに

醒睡笑、七、わたくしは、高野ひじりに、あらねども、おいにおいたる、ゆるに
めさずや。

○室町時代

幸若鞍馬出、聲ばかりに威さんと、おれ(對稱か)はく、とぞ威しける。

史記抄、六、一二 イカサマ、ヲレハ、サワ不聽ザツタゾ。

閑吟集、ぬしあるをれを、何としようか。

運歩色葉集(甲) 己、ヲレ、

江戸時代

醒睡笑、八、今度のをどりが、うらは、一向、氣にあはなんだ。

雑兵物語、上、挾箱持、五貫目斗の玉だつけが、おれが鼻先へ當て、云々、同、

おらが家中では、云々、喧嘩口論は、かたく御禁制だ。

後撰夷曲集、七、百首歌の中、取りなりを、見るとわしらが、癖として、つかみ
つく程、君ぞ戀しき。

雑兵物語、上、沓持、わつちめは、沓籠御許され申て、沓袋をせおひ申した。

○室町時代

【三九】 【四〇】 代名詞

謠曲、田村、いかに、是なる人に、尋ね申すべき事の候、こなた(自稱)の事にて候か、何事にて候ぞ。

閑吟集、新茶のちやつぼよなふ、いれてののちは、こちや(我、濃茶)まらぬまらぬ。

狂言記、二人大名、其方がいそがば、こちもいそぐ。同、鹿狩、なうく、御坊、云々、こなた(自稱)の事でござるか。

○室町時代

史記抄、十、四一、ソチガ云ワズトモ、我モサ思タゾ。

孟子抄、十一、三、ソチガ云ヤウニ、水ハ東西ヲバワケヌガ、上下ノヘダテハ有ゾ。

狂言記、鍋八撥、先へ來た某(自稱)をのけうより、そちのけ。同、宗論、聊爾(れうじ)な申事ながら、こなた(對稱)は、どれからどれへござるぞ。同、吃、とかく、そなたにあきはてた。同、武悪、おまへ(主人を指す)の御太刀を貸さつしやれませう。同、鹿狩、さあく、ござれく、先づ、おまへ、先へござりませう。身共をば、旦那に取らしやれて下されい、何がさて、おまへ様さ

へもつてならしやれて下さるならば、私が爲には、一の旦那でござる。

ませう。身共をば、旦那に取らしやれて下されい、何がさて、おまへ様さ

へもつてならしやれて下さるならば、私が爲には、一の旦那でござる。

江戸時代

昨日は今日の物語、そなたを見れば、むねがわるい。

醒睡笑、一、そなたは、それではなきか、聖いや、そちをば夢にも知らぬ。同、

四、こなた(對稱)さまのそくさいにあるこそ、道理にて候へ。

古今夷曲集、九、勝尾寺に、義空とて、狂歌の上手あり、彼には及ばじと、人のいへりければ、我歌に、などてあなたか、ちを寺のどぎくぎくう、させてみせます。

諸國盆踊唱歌、讃岐、八島山には、大谷小たに、なせにこなた(對稱)に、ながないぞ。

淋敷座之慰、吉原、しよくりしよぶし、そちと、こちとで、二世迄そをふ。

雑兵物語、下、夫丸、お侍衆をはじめ、こなた(對稱)なども、具足を着なされ。

同、下、又、そなたや、おれらが様な馬取づれでさへ、同、上、馬印持旗差、

にし(對稱、主の訛)は、其通りか、おれも、袋に二つ入たを、一つをば竿につ、ばめて、一つは脊中に引付た。

○平安朝時代

宇津保物語、藤原君、おほかたは、女の、などかくは申す、くやつ、又しばかりか

けよ。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、行綱ふぐりをあぶる段、かたすみにかくれて、きやつに、かなしうはかられぬるこそとて、

室町時代

義經記、一、鬼一法眼の事、きやつは、ふしぎの物いひかな。

幸若、烏帽子折、きやつばらは、椽の下へ隠れうぞ。

史記抄、六、二七 キヤツモ、ナントシタヤラウ。

狂言記、鹿狩、あいつ、呼びよせ、なぶらうと存ずる。同、鞆猿、申し、き

やつが申しまするは、

江戸時代

醒睡笑、五、に、くいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある。

鹿の巻筆、一、ばんどう屋才介、あいつらが、一二を争ふて、四かねるやつで

ない。

鹿の巻筆、一ばんどう屋才介、あいつらが、一二を争ふて、四かねるやつで

ない。

雑兵物語、上、挾箱持、あいつめは、他の人数を相手にして、おめくとしたつらで、堪忍したといつても、

○室町時代

狂言記、黒塗、案内とは、どなたでござる。同、吟賀、ありや、どなたぢや。

【五〇】指示代名詞の不定稱が「も」に伴つて、「どれもよい」「どこもふさがつて居る」など云えば「皆」の意となる。

不定稱で、丁寧に「いすれでもよろしうございます」、「物事に「いすれに住みましても、（場所に）「いすれえも向きます」（方角に）など云う「いすれ」と云う語もあるけれども、「どちら」と云う語が、どれにも通う。

近稱に、「こいら」「こふいら」、中稱に、「そいら」「そこいら」、遠稱に、「あいら」「あすこいら」、不定稱に、「どこいら」と云うのもあるが、用いぬがよい。

○室町時代

史記抄、十、七 司馬遷ガ、アツチ、コチ、アルイタ時ノ事ゾ。

孟子抄、一、三 軍兵ヲ用テ、アチヘハ國ヲトリ、コチヘハ國ヲトリスル程ニ、

【五〇】代名詞

江戸時代

雑兵物語、下、玉箱持、長ひ棒の兩方に玉箱をひつかけた所で、あつちへあたり、こつちへつかへて、一足もあよばれない。

○平安朝時代

梁塵秘抄、二、佛歌、ほとけは、どこよりか、いでたまふ。同、二、四句神歌、神分、熊野へまいるには、きち(紀路)といせち(伊勢路)の、どれち(かし)、どれとを(し)。同、二、佛歌、釋迦の住所は、どこ〜ぞ。

室町時代

義經記、判官北國落の事、どこ山伏と、とはんずる時は、どこ山伏とか、いはんずる。

史記抄、十、三五 ドレモ、眞實ノ處へハイカヌゾ。同、六、一五 ドコカラハ、イカホド、アソコカラハ、イクラ出セ、ト云コトゾ。同、六、二八 ドチヘイカレタトモ、マダ不見ホドニ、

孟子抄、七、八 ドレデマレ、不仁デ、天下ヲ取タト云事ハ、アルマイゾ。同、七、

一五 我ハ、王者ニ成ウト思ハズトモ、道ヲダニ行ハ、民ガ、ドチヘガナ、

行ト思フ時分デヤ程ニ、擧テ歸服セウゾ。

一五 我ハ、王者ニ成ウト思ハズトモ、道ヲダニ行ハゞ、民ガ、ドチヘガナ、

行ト思フ時分ヂヤ程ニ、舉テ歸服セウゾ。

狂言記、二人袴、必ず、どちへもござるな。同、鞞猿、どれへぞ、野遊山に出
うと存ずる。同、宗論、いかさま、どこやらで聞いたやうな。

江戸時代

昨日は今日の物語、どこらがいとうござる、ととひければ、おびしより下
がいたいといふ。

醒睡笑、五、いかがして、呑みたるやらん、つらもどこも、赤漆にてぬりたる
風情なるが、同、七、情じやうのこはきは、どちもまけまい。

正章千句、十、雪、馬つきは、どこからどこと、さだまりて、

東海道名所記、田子の浦、浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、
雑兵物語、下、並中間、どこの人数だかしらない。

【五四】【五五】 「いつ」なにが「も」に伴つて、「いつも」居る「なにもない」「なにも」知らな
い「など」云えば、「すべての時」すべての物事「の意となる。

「いつ」を、「いつく」と重ねて、複数を示すことがある。

「なに」(何)を、「なん」と云うわ、平安朝時代の悦目抄に、「いま一字を、かな、たらずして、

なん／＼としてや、してよ、など、せんなき假名を具する也。童蒙頌韻に、那、ナ
 ン、鎌倉時代の假名論語述而篇に、じんをもとめて、じんをえたり、又、なん
 のうらみかあらんや。〔求仁而得仁、又何怨〕室町時代の史記抄十、五九「ナン十
 代ト云テ、元朝マデ封ゼラル、ゾ」。狂言記、宗論、そなたに、意見がしたうおち
 やるわいの、なんでおちやるぞ。そなたは、なんとして来たぞ。江戸時代の醒
 睡笑、三、あれほどおそろしき所に、なんとして、ひとりはずまれん。同、四、そち
 は、えならぬ時宜をいふ、なんのいはれぞ。など、見える。

「何」どこと云う不定の指示代名詞に並べて、「か」と云う語を用いて、「何もかも、な
 くなつた」「何だのかだのと云う」「何やかやで、いそがしい」「何とかかとかしよう
 「何のかのと云う」どこもかも、一面に花だなど用いられる。この「か」わ、古い他
 稱代名詞の「何がしくれがし」の轉か、又わ、彼かれであるか、又わ疑う助詞の「か」であ
 るか、分らぬ。室町時代、史記抄、十四、八 「逗撓トハ、ナンヂヤ、カヂヤト云テ、戦
 モセイデ、ヌケアルイタナリゾ。」同、十四、九 「部伍トハ、軍ニ、部ガイクツ、其部
 ゴトニ、校尉イクタリ、ナニイクタリ、カイクタリ、ナンド、チ、定テヲクモノゾ。」
 狂言記、吟聲、「たゞ、何事もか事も、許したまへや。」江戸時代、東海道名所記、田

子の浦、「浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、」

狂言記、吟聲、「たゞ、何事もか事も、許したまへや。」江戸時代、東海道名所記、田

子の浦、「浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、」

【五五】 室町時代、史記抄、四、六四八州ト云ハ、ドレ／＼デアラウヅ、六國ニ、ドレ
ヲソヘウヅ。

【五六】 此「こ」「そ」「あ」「ど」「わ」、一音で、指示代名詞である。

こゝに箱がある、この中に、何があるか。

生徒が卒業した、その兄も卒業した。

西南の役は、明治十年である、あの時に、西郷隆盛が死んだ。

英國からも、米國からも、大使が來た、どの國の大使も、人物だ。

しかし、助詞の「の」に伴つてばかり用いられる、そうして「の」が附いて一語となつて、下の名詞を指す意味に用いられる事が多い、又「の」の附いて一語となつたものわ、代名詞でわれないが、姑く、かように説いて置く。室町時代、義經記、三の口の關をとをり給ふ事、「どの山を、どののはさまにかゝりて、ゆかんずるぞ。」

○「このような」そのような「あのような」どのようなと云ふと同じ意味で、「こんな物」そんな事「あんな所」どんな人など云ふ事があり、その名詞を略して、「子供の育ちが、こんなな（育ち）」になつた。「騒ぎは、そんなな（騒ぎ）」でもあるまい。「など」も用

いる、此事わ、後の形容詞の處(一六七)でも説く。

數 詞

【五九】「ふたつ」を「ふたツつ」とも云う。

物事を、一つくゝに數えて呼ぶのに、次のように云う事もある。

ひい ふう ふう ふう ふう ふう ふう ふう ふう ふう
ひと ふた みい よう いつ むう な、 やあ かい とう

【六一】 此外に、戸籍、會計などに、「壹」「貳」「參」「拾」「十」などと書くことがある、入れ筆を防ぐ爲である。又「萬」を「万」と書くことがあり、「零」○もあり、「百」を、「束」と云うこともある。

數を呼ぶに、次のように云ふことがある、聞きちがわせぬ爲である。

二百四十番 四百七十九圓

【六四】「なのか」を「なぬか」とも云う。

【七一】 又、「三分一」「四分一」など、も云い、三分の一を「みつひとつ」、又「わ三分の一」とも云い、四分の一を「よつひとつ」、又「わ四か一」と云い、三分の二を「みつ割りふたつ」とも云う。

【七三】 「割」わ、或る數の十分の一を云い、「分」朱「わ、割」の十分の一を云う。

を「みつ割りふたつ」とも云う。

【七三】 「割^わ、或る数の十分の一を云い、分^ぶ」朱^{しゆ}「わ、割^わ」の十分の一を云う。

【七四】 「倍」と云い、「一倍」と云うわ、「二倍」と云うと同じである。「二八、十六、四九、三十、六」など云うわ、八を二倍し、九を四倍するを云う。

【七五】 「一」の組「二」の鳥居「三」の橋「四」の側^{かた}「五」の巻^{まき}「六」日本「一」大正二年四月十日「五」など云い、又「初等」「中等」「高等」「甲」「乙」「丙」「丁」などもある。

【七七】 (六四)を見よ、「いちにちを」「いちじつ、又わ、ついたち、(朔日)とも云い、一箇月の終の日を、つごもり、(晦日)又わ、みそか(三十日)と云うことがある。

【七八】 「なにを、なん」と云うことに附いてわ、(五四)に云つておいた。

【八一】 紀元二千五百七十一年を、「二五七一年」と云い、二百八番地を、「二〇八番地」と云うこともある。又、「七八番地」と云えば、七番地八番地のあたり、と云う意味ともなり、「二三日」「四五度」など云うも、同じ意味である、七番地と八番地とを合せて云う意味ともなり、「明治三十七八年」など云うも同じ意味である、七十八番地の意味ともなつて、紛れやすい。

又、「二七の日」「四九の日」など云うわ、「二日」と七日と、十二日と十七日と、二十二日と二十七日と、「四日」と九日と、十四日と十九日と、二十四日と二十九日との事